



ISSN 2185-9787

さやばね

ニューシリーズ

No. 36 December 2019

日本甲虫学会

SAYABANE N. S.
The Coleopterological Society of Japan

近現代文化兜虫学

保科英人

〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学教育学部

Cultural Coleoptology (Scarabaeidae: Dynastinae) in the Modern Japan

本誌前号に「近現代文化鍬形虫学」を上程した(保科, 2019b). 同拙文で宣言したように, 筆者は「近現代文化蚤学」(保科, 2017a)を第一作目とする近現代文化甲虫学三部作を完成させる目標を掲げた. 本稿はその最後となる, カブトムシを対象にした「近現代文化兜虫学」である. 実は, 筆者は既に現代文化カブトムシ学を英語論文にて発表済みである(Hoshina & Takada, 2012). ただ, それから7年が経過して筆者の文化カブトムシ学に関する知見も随分と増えた. ここで今一度カブトムシにまつわる文化をまとめ直してもよいだろう.

I. 近代文化兜虫学こぼれ話

近代日本の主要ペット昆虫と言えば, 鳴く虫(直翅目)とホタルである(保科, 2017b, 2018a; Hoshina, 2017, 2018). また, カジカガエルもペット蛙として人気を博していた(保科, 2019a). これらペット動物は緑日等で売られ, その小売価格は新聞の「虫相場」とのコーナーで読者に周知されていた. しかし, 少なくとも新聞記事を読む限りでは, 現在のペット昆虫の横綱的存在であるクワガタムシが緑日で売られていたとの形跡は見つけられない(保科, 2019b). これはカブトムシにも当てはまる. 本当に明治大正期にカブトムシは全く売られていなかったのか, 仮にごく一部で売られていたのであれば, その価格はいかほどのものであった

か, 筆者はこれらの疑問に対する解答を持っていない. 本稿では近代日本人とカブトムシにまつわる僅かばかりの話を紹介する.

1) カブトムシとクワガタムシの混同

ベテラン会員であれ新入会員であれ, 我が日本甲虫学会に名を連ねていれば, カブトムシとクワガタムシを見間違えることはない. 否, 虫にさほど興味がない一般人と言えども, オスであればこの両者の区別がつかない方はそうそういないはずだ. しかし, 近代期の新聞では, カブトとクワガタを混同したような挿絵がいくつか見られる.

例えば, 大正14年4月19日付読売新聞. 戦前期に漫画や挿絵の世界で活躍した井元水明による, 「兜蟲」とのタイトルの一コマ漫画が掲載された. 漫画では, サーベルをベルトに吊った田舎連隊の陸軍将校が腰をかがめて, 露店のカブトムシのゼンマイ玩具を物色している. そこに通りがかったマダムには将校自身がカブトムシに見えたらしく, 「あれカブトムシよ」とあざ笑っている, との内容だ. この漫画自体が面白いかな否かはこの際どうでもよい. 筆者が指摘したいのは, 漫画内で描かれているゼンマイ玩具の絵が, クワガタムシにしか見えない, との点だ.

似たような事例は他にもある. 昭和9年1月28日付よみうり子供新聞に「コイヌとカブト虫」との小話が載った. 「ポチは去年生まれたばかりの

子犬で、飼い主が可愛がってくれるのをいいことに、人の書斎を我が物顔で暴れまわります。しかし、これを快く思っていないカブト虫君、ポチに制裁を加えてやろうと、ポチの背中に這い上がりました。ポチはタスケテとベソをかいています」論評する必要もない駄話であるが、問題はその挿絵だ。犬の背中にくっつく虫のシルエットがどう見てもクワガタムシなのである。

近代期の新聞はカブトとクワガタを厳密に区別しなかった、と言うことなのだろうか？これは現代人からすれば非常に奇異に思える。

2) 賽銭泥棒とカブトムシ

どこで聞いたか読んだか失念したが、カブトムシにひもを付けて賽銭箱の底に下ろし、中の小銭を掴ませたあと、ひもを引っ張り上げてカネを失敬するとの泥棒の手口があるそうだ。例えば、明治10年12月1日付読売新聞によると、西京祇園町の白瀧平兵衛の息子の國太郎は、ひもを結んだカブトムシを使って、結構な小銭を賽銭箱から盗んでいたと言う。

上記の3面記事掲載から約150年たった2018年放送のTVアニメ『あそびあそばせ』第7話でも、主人公3人組の一人の本田華子が他の二人に「クワガタにひもを付ければ賽銭ドロができる」と説明する場面がある。再現可能かどうかは別にして、伝統的にこのようなコソ泥法の着想が我が国にあることは確かなのだろう。

3) 森永ミルクキャラメルの新聞広告の昆虫漫画に登場するカブトムシ

昭和11年秋から冬にかけて、大阪朝日新聞と東京朝日新聞（共に現在の朝日新聞の前身）で、森永ミルクキャラメルの広告昆虫漫画が約70回連載された（保科，2014b）。この昆虫漫画の概要については前号（保科，2019b）で解説したので、本稿では繰り返さない。ここで東京毎日新聞に掲載された漫画のうち、カブトムシが描かれた回を抜粋して内容を書き出してみる。

- ・第35回（10月31日付）。昆虫たちによる野球。カブトムシのポジションはキャッチャーである。
- ・第56回（11月25日付）。たくさんのアリたちが「御用だ、御用だ」と言いつつ、カブトムシを捕獲する。
- ・第57回（11月26日付）。カブトムシが人間採集に出かける。
- ・第67回（12月8日付）。日本のカブトムシはド

イツにはいない。だからドイツの子供たちはカブトムシを見て喜んでいる。

この4回の昆虫漫画から、近代日本人の何か特別なカブトムシ観を読み取ることはできない。強いて言うなら、第35回、第56回、第57回の内容から「カブトムシは体が大きな虫だ」程度の認識である。面白くも何ともない。

第67回の昆虫漫画については補足しておく必要がある。昭和11年12月、森永ミルクキャラメルの昆虫漫画は「日独昆虫親善」と題売った4回の漫画を掲載した。第67回のカブトムシ漫画はその一つである。実は、この年の12月は、日本がナチスドイツとの間に日独防共協定を結んだ翌月にあたる。「日独昆虫親善」漫画がそのような時勢を反映したものであることは言うまでもない。漫画中にはカブトムシと共にナチスの鉤十字が描かれており、戦争が近づく時代の暗影を投げかけている。ただ、日本のカブトムシの生き虫なり標本なりがドイツの子供に贈られたとの事実があったかどうかについては興味があるところだ。

なお、翌々年の昭和13年8月にヒトラー・ユーゲントが来日した際、ドイツの少年たちが銀座でスズムシを買ったとの記録がある（保科，2017b）。よって、彼らの中にはカブトムシを探し求める者もいた、と想像することも可能ではある。

4) 戦争とカブトムシ

明治36年10月11日付読売新聞掲載の「滑稽問答」。問：一寸の蟲にも五分の魂ありといふが内閣諸公に何寸ほどの魂ありや。答：愚かな問を起すものかな螳螂ハ斧を持ちイボタの虫ハ鎗を持つ其他青虫蠶虫など虫も其れゝ武器を持てばこそ魂をも持つなれ、然るに武器ありながら戦争も出来ず露國にへコマされてる様な人間でハ虫にも劣るものなれば魂のあるべき筈なし故に一名魂がナイ閣ともいふなり。

この問答の中身を理解するには多少の近代史の知識がいる。明治36年と言えば日露開戦の前年あたり、東京帝大教授の戸水寛人ら七博士による対露主戦論の意見書提出、対露同志会の結成など、開戦に踏み切れない桂太郎内閣の弱腰外交に対し、世論の批判が高まっていた年だ。ようするにこの問答の作者は桂内閣の面々には虫ほどの根性もない、と貶しているわけである。何はともあれ、この問答から、文化昆虫学的には「青虫（カブトムシ）は武装した虫」との現代にも通じるカブトムシ観が見られるのに対して、「蠶虫（クワガタムシ）も武

器を持つ虫の一つ」との現代人とは大きくかけ離れた感覚を読み取ることができる。

カブトムシを戦争と絡める発想は支那事変期の新聞記事にも見られる。昭和12年9月4日、寺内寿一大将指揮下の北支那方面軍は保定作戦を開始した(秦, 1961)。この進軍に際して、読売新聞の瀧本特派員は天津から津浦線に沿って滄州方面に南下する方面軍第二軍に従軍した。そして、瀧本特派員は官唐屯陣地奪取戦を取材した際、同行を許可された大多則三郎部隊を“甲虫隊”と呼んだ(同年9月6日付読売新聞)。同日の同紙1面には「勇猛甲虫隊決死従軍」とデカデカと報じられている。新聞記事を読むだけでは詳細はわからないが、「甲虫に同乗を許された」などの文言から、瀧本特派員はどうやら装甲車ないしは戦車から甲虫をイメージしたらしい。

5) “甲虫”とは甲虫目かカブトムシか？

(4)で紹介した読売新聞の瀧本特派員が言う“甲虫”とはコウチュウ類全般なのか、それともカブトムシなのか、との疑問が湧く。今のところ、筆者は支那事変に従軍した瀧本特派員が名付けた甲虫部隊とは、日本人に馴染み深い武装昆虫であるカブトムシから生み出された命名ではないかと考えている。しかし、戦前期の「甲虫」と現代の「甲虫」は用いられ方が大きく異なる点は注意を要する。現代では甲虫を「かぶとむし」と訓読みすることはまずありえず、甲虫目(鞘翅目)の昆虫の総称との意味でのみ用いている。しかし、戦前期の新聞では両方の意味での使用例が見受けられる。

例えば、昭和11年11月1日付読売新聞は子供向けに「流線型オン・パレード」との特集記事を組んだ。文字通り流線形を持つ生き物や乗り物の紹介であるが、そのうちの一つが“流線型の甲虫ヘラクレスオオカブトムシ”だ。そして、この“甲虫”には「かぶとむし」との振り仮名が打ってある。一方、昭和3年7月22日付読売新聞では現在のタイワンテナガコガネこと手長黄金虫が「日本一大きい甲虫」(注、振り仮名なし)と解説されている。また、昭和15年10月6日付東京朝日新聞は大害虫のコロラドハムシを“コロラド甲虫”(これも振り仮名なし)と呼んでいる。余談ながら、東京朝日新聞のこの記事は、イギリス空軍がドイツの馬鈴薯生産にダメージを与えることを目的としたコロラドハムシ散布計画を報じた記事である。コロラドハムシの生き虫を昆虫爆弾として活用するアイデアは第二次大戦中だけでなく、第一次大戦中の英国空軍参謀のティヴァントン卿も同じ作戦を考

えていたと言う(田中, 2008)。

新聞以外の出版物を見てみよう。エドガー・アラン・ポー著『The Gold-Bug』の大正時代の訳本に、岡田實磨の手によるものがある。本の原題を直訳すれば「黄金虫」であるが、岡田はタイトルに『甲蟲』との訳語を与え、さらに本文中でも“かぶとむし”との振り仮名を付けて「甲蟲」との単語を使用している(岡田, 1913)。エドガー・アラン・ポーの黄金虫が実際にどの昆虫がモデルなのかは諸説あるようだが、カブトムシであるとする有力な説はない。

こうして見ると、戦前の日本人は「甲虫」とはグループの名称であるのか、カブトムシ単独を指す和名なのかの区別を厳密につけていない。もっと言えば「甲虫」を“かぶとむし”と訓読みする場合でも、現代の分類学上のColeopteraに当てはめるなど、そもそも「甲虫」との単語の意味するところを深く考慮せずに文章にしていたような気がする。

最後に「甲虫」が何らかの特定の種を指すのか、Coleoptera全体のことを指すかの混乱が見られるのは、何も日本の近代新聞だけではないことも付け加えておこう。例えば、明治初期のお雇い外国人の化学教師で、19世紀を代表する知日派米国人のW. E. グリフィス(1843-1928)(図1)は、帰国後に日本の昆虫をキャラクターにしたお伽話を多数執筆した(保科, 2014a)。その一つ「The fire-fly's lovers」(ホタルの求婚者)の登場人物には、カブトムシやクワガタムシ、コガネムシと言った有名どころの甲虫に加え、なぜか「the Beetle」との何とも翻訳に困る虫が混ざっている。他のお伽話でもコウイカとイカが別キャラクターとして出て来る話があり、グリフィスはグループ名と種名をきちんと区別できていなかったのではないかと勘繰りたくなる。実際、グリフィスの大学時代の履修科目を見る限りでは、彼に昆虫学や動物学に深い素養があったとは思えない(蔵原, 2000)。このあたりは化学教師であって生物教師ではなかったグリフィスの限界である。

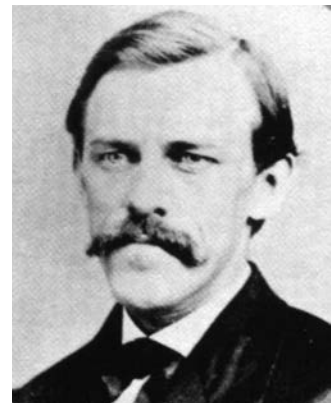


図1. W. E. グリフィス。

6) 結論. 近代日本人にあまり関心を持たれなかったカブトムシ

筆者は前号の「近現代文化鍬形虫学」で近代日本人はそもそもクワガタムシに対する関心が低かった、と述べた。事実、読売新聞データベース「ヨミダス」で、「クワガタムシ」「鍬形虫」で検索をかけると、ヒットする最も古い記事の掲載年は戦後の昭和27年である(保科, 2019b)。カブトムシはクワガタムシよりは多少マシで、明治大正・昭和戦前期の新聞記事中で何度か取り上げられている。とは言え、ホタルやスズムシと比較すると、カブトムシ関連記事は圧倒的に少ないのは厳然たる事実である。

読売新聞データベース「ヨミダス」と朝日新聞データベース「聞蔵IIビジュアル」で、「カブトムシ」「かぶとむし」「兜虫」「冑虫」「甲虫」で検索をかけた場合、多くヒットするのは(5)で述べたエドガー・アラン・ポーの翻訳本『甲虫』や龍膽寺雄『虹と兜虫』などの書籍広告である。有名な推理小説である前者と違い、後者は補足説明が必要だろう。『虹と兜虫』は昭和7年連載開始で、古い鎧に身を固めた怪人が登場する伝奇小説である。小説中には「抜打ちざまにチャンバラでも始めさせて御覧なさい。まさにこれは兜虫の喧嘩つものです」の類の表現がいくつかあるもの(龍膽寺, 1986)、昆虫種としてのカブトムシが物語に深く関与するわけではない。本小説は文化甲虫学上の資料と呼べる代物ではないだろう。その他、大正14年7月15日付読売新聞には童話「かぶと虫の旅行」が掲載されたが、独特のカブトムシ観が描かれているわけでもなく、これと言った文化甲虫学上の論点は見出せない。

近代期にカブトムシの生き虫が売られていたとの新聞記事を未だ見つけていないと上述した。最近、筆者は戦前生まれの方に会うたびに「戦前の縁日でカブトやクワガタは売っていたか?」としつつこく尋ねているが、やはりイエスとの回答は得られていない。実は、江戸期には飼育下でカブトムシの幼虫を羽化させられることは既に知られていた(金子ら, 1992)。また、明治初期には虫屋がカブトムシに紙の大八車を引かせる見世物を提供していたのも事実だ(保科, 2014a)。にもかかわらず、近代日本人はカブトムシを大量養殖して縁日で売る、との着想を持たなかったのである。その理由として「カブトムシは昔はそこら中にいたから養殖して売る必要はなかった」との答えがまず思い浮かぶ。しかし、戦前期は養殖個体のスズムシやキリギリス、エンマコオロギが虫市場に投入

されていたことを鑑みると(保科, 2017b)、「昔はたくさんいたから」との回答は筆者を100%納得させるものではない。

戦前日本人には、カブトムシを育てる着想がなかったことを暗示する記事がある。敗戦間近の昭和20年7月18日付読売新聞は、食糧事情改善のためにカブトムシの蛹食を勧めている。記事には「採取してきた幼虫を少量の土とともにバケツに入れておけば、やがて蛹になる。これは中々珍味である。成虫も頭部は固いが、中身はイナゴのようなので食える」とある(傍点筆者)。少量の土と書いていところから、採集対象は蛹化間近の終齢幼虫のはずである。この記事が掲載された頃、もちろん庶民は祖国の無条件降伏が翌月に迫っていることを知らない。戦争はまだまだ続くと思っている。ならば、「来年の食料として、カブトムシの卵や小さい幼虫を今のうちに大量確保して自宅で育てましょう。飼いはかくかくしかじか」との記事になってもよさそうなものだが、そうは書かれていない。ペット目的にせよ食料目的にせよ、現代人と異なり、近代日本人にはカブトムシを後生大事に累代飼育する、との発想が乏しかったのだ。

明治大正・昭和戦前期の近代日本人は、鳴き声を聞く、どこか哀しげな光を楽しむことを目的として昆虫を飼育した(保科, 2019b)。やはり我らが先人たちは、クワガタムシ同様、情緒対象にはなりえないカブトムシに大きな親しみや関心を持たなかったのである。

II. 現代文化兜虫学こぼれ話

近代日本人とは異なり、現代人、特に昆虫飼育愛好家はカブトムシとクワガタムシに熱中している。ペット昆虫大国ニッポンにおけるクワガタの存在感の大きさは保科(2019b)で述べた。カブトムシもまたペット昆虫として大人気であり、ここで改めて説明する必要もないだろう。

本稿では平成令和の現代文化、特にゲームやアニメにおけるカブトムシの登場事例について紹介し、昨今日本人のカブトムシ観について考察することにする。なお、我が国のゲームにおけるカブトムシの代表事例は、何と言っても『甲虫王者ムシキング』である。しかし、これについては保科(2019b)で言及済みなので、本稿では詳しく取り上げない。

1) 力強さの象徴としてのカブトムシ

平成31年2月23日付配信のCOURRIER JAPONは、メキシコのユカタン州の徳産品である、生き

たカブトムシを用いた珍ブローチを取り上げた。記事によれば、この地域ではマヤ文明の時代からカブトムシの標本をアクセサリとするの風習があったと言う。なお、「メキシコでハ女の着物へ甲蟲と金銀の針金にて結びつけ是を飾りにすることが専ら流行」(明治11年11月15日付読売新聞)と、同国の一風変わったアクセサリは、日本でも昔から知られていた。ところ変わって我が国、本年4～5月に東京ドームシティで「アウトサイド・ジャパン展」が開催された。アウトサイダー・アートと呼ばれる美術の本流からかけ離れた異色作を集めた展覧会だが、そこでは大量のカブトムシやコガネムシの死骸から成る鎧兜が展覧されている。

このようにカブトムシを飾りに見立てると、との感性は世界のあちこちにあるようだが、現代文化のカブトムシの主流は美ではなく力強さの象徴である。そして、この延長上に、カブトムシ=運送業との発想がある。例えば、2018年放送のTVアニメ『ハクメイとミコチ』。物語の舞台は身長9cmの人のほか、哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫たちが互いにコミュニケーションを取り合い、同等に暮らすファンタジー世界である。そして、この世界ではカブトムシは運送業に携わっている、との設定になっている。なお、カブトムシ=運び屋との連想は何も二次元世界だけではない。数年前、筆者は名古屋市大須でカブトムシが描かれた



図2. 戦国 BASARA3 の小早川秀秋。「戦国 BASARA3 宴 オフィシャルコンプリートガイド」より。
© CAPCON CO., LTD. 2011.

運送業者のトラックを目撃したことがある。

次に、日本が世界に誇る RPG である『ドラゴンクエスト』では、カブトムシの力強さはパワーではなく、体の頑丈さに変換されている。『ドラゴンクエスト8』のカブトムシ型モンスターである「かぶとこぞう」は、体力と比して異常に高い防御力が設定されているのである (Hoshina & Takada, 2012)。その他、2011年放送のTVアニメ『灼眼のシャナIII』のカブトムシ型の敵の「リベザル」

は、百戦錬磨の優れた将軍との位置づけであることも付け加えておこう。

一方、全く逆の事例も存在する。PlayStation3 用ゲーム『戦国 BASARA3』の小早川秀秋は、カブトムシのような風貌を持つ(図2)。史実としての小早川秀秋は関ヶ原の合戦で見苦しい裏切りをする武将としての評価が定着しているが、『戦国 BASARA3』の秀秋は徹底的に気弱なキャラクターである。また、2011年発売のコミック『モチ虫王者カブトキング』の主人公のダイゴローというカブトムシも、とにかくどうしようもないヤツである。この2作品では、なぜカブトムシが情けなく描かれているのか? 筆者は、これは力強いカブトムシとの定評の裏返しであると解釈する。世間一般ではカブトムシは強さの象徴であり、それ故に逆説的にあえてみっともなく描くことで、即ギャグやコミカルになりうるのである。

2) 戦車と化すカブトムシ

上述の大正末の井元水明の漫画に見られるように、戦前日本には既にカブトムシ型の玩具が売られていた。また、大正10年11月15日付読売新聞には、舶来品のカブトムシの玩具が紹介されている。これはゼンマイ仕掛けのブリキの玩具だが、ただ歩くだけでなく、触角と羽も同時に動いたと言うのだから恐れ入る。現代のゾイドに匹敵する精巧さではないか。それ故かお値段5円60銭なり。大正時代後半は、大卒の国家公務員の初任給が70円、大工の日当が3円と言う時代である(森永, 2008)。当時の5～6円は現在の貨幣価値で数万円と言ったところか。舶来品のカブトムシの玩具は庶民には高嶺の花とまでは言えないまでも、子供にホイホイ与えられるものではなかったはずだ。

カブトムシが玩具のモチーフとされやすいのは、もちろん子供たちに人気があるからだだが、動物形態学上の要因も大きい。生き物を玩具にする際、デフォルメは必然となるが、カブトムシの場合、とりあえず角を生やしておけば、造形に多少難があっても、万民がその商品をカブトムシと認識してくれる。図3は昭和30～40年代のものとして推定される日本製のブリキのおもちゃだ。脚が4本しかなく、複眼が角の根元に位置しても、これはカブトムシ以外の何物にも見えないのである。逆にオサムシを玩具にすることを考えてみればよい。設計がまずければ、完成品はゴキブリかクワガタのメスに見えてしまうはずである。

(1)で述べたカブトムシの力強さと、玩具のモチーフになりやすい形態の特徴。この二つの要



図3. プリキ製のカブトムシ型の玩具。昭和30～40年代のものと思われる。



図4. タイムボカンの『メカブトン』。©タツノコプロ。前列左と中央は筆者が製作・塗装したもの。前列右と後列左はかなりのレア玩具で、ネットオークションでは10万円以上の値が付くこともある。左下は大きさ比較用の500mlペットボトル。

素が組み合わさると、到着点が自然に見えて来る。アニメやゲーム、プラモデルの世界では、カブトムシは戦闘マシンになるのである。ゾイドシリーズの『サイカーチス』『カブター』、武装神姫の『ランサメント』、忍風戦隊ハリケンジャーの『ゴウライビートル』などはカブトムシ型戦闘マシンのほんの一例だ。特撮の世界でも『仮面ライダーストロンガー』『仮面ライダーブレイド』、ウルトラマンレオの怪獣『サタンビートル』などがカブトムシをモチーフとしている(円谷プロダクション, 2005; 宮ノ下, 2014)。

ここまでは前号「近現代文化鍬形虫学」で述べたクワガタムシ型戦闘機と同じだ。違うのは、クワガタムシが空駆ける航空戦闘機であるのに対して、カブトムシはどっしりとした体型から戦車とされがちな点にある。タイムボカンの『メカブトン』(図4)はその好例である。

3) なぜか同列ないしはライバルとして扱われるカブトムシ亜科とクワガタムシ科

子供の時分、筆者は昆虫図鑑で「カブトムシは世界で○種、クワガタムシは△種」との類の対比を読んだ記憶がある。言うまでもなく、これはオカシイ。カブトムシはコガネムシ科内の1亜科で、一方でクワガタムシは独立科である。したがって両者の種数比較は、例えるなら大阪府と神戸市の人口を比べるに等しい、お間抜けな行為のはずだ。

しかし、世間ではカブトムシとクワガタムシを対比させる、ライバル関係に置く、または対等にセットにして扱うやり方が完全に定着している。両者を一緒に掲げた子供向け図説はナンボでもある。そして、カブトムシとクワガタムシを

対にする発想は何も現代特有のものではない。例えば、江戸後期の栗本丹洲著『千蟲譜』第三巻(上)では、既に両者をセットにして同時に解説する発想が見られるのである。

『甲虫王者ムシキング』のような甲虫格闘ゲームはもちろんだが、アニメのちょっとした何気ないシーンでも、カブトムシとクワガタムシは相対するものとして位置づけられていることがわかる。例えば、本年放送のTVアニメ『からかい上手の高木さん2』(図5)。本作は高木さんと西片君との二人の男女中学生が主人公。西片君は高木さんに常日頃から対抗心を燃やしているのだが、実際の2人はステディなのか、カップルなのか、ただの級友なのか、いまいち微妙な関係である。第6話で二人は菓子屋に買い物に行く。しかし、彼らを選ぶ駄菓子屋は相反するものばかり。そのうち、西片君が手に取ったのはカブトムシが包装絵柄の“カブトブラックチョコレート”、高木さんが“クワガタホワイトチョコレート”だったのである。その

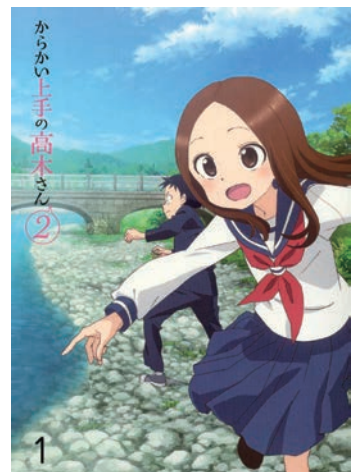


図5. 『からかい上手の高木さん2』Brue-ray第1巻。©山本崇一郎・小学館/からかい上手の高木さん2製作委員会。

後、二人は同じカップラーメンを仲良く食べているところを、クラスメートに目撃されるとのオチになる。

『甲虫王者ムシキング』ないしはそれに影響された甲虫格闘ゲームの数々、そして日常のほのぼのとした一コマ。日本社会では、ありとあらゆる場面でカブトムシとクワガタムシは片や亜科、片や独立科との分類学的事実を超越した、未来永劫のライバル関係に置かれているのである。

4) “カブクワ” か “クワカブ” か？

巷ではプロ野球の伝統の一戦を巨人阪神戦と呼ぶようだが、我々大阪人は阪神巨人戦と言う。その理由は説明するまでもなく、愛すべきタイガースを憎きジャイアンツよりも前に置きたいからである。このように、我々は日本語では相対する、ないしは並列する二つの単語を並べるとき、優先すべき方を前に持ってくるはず、と思いがちだ。例えば、コテコテの関西人を除けば、日本の二大都市は“東京・大阪”であって、“大阪・東京”ではないからである。

しかしながら、大阪人の意固地は別にして、並列語内で肯定的なもの、尊重すべきものが先に置かれるとのルールは、実は日本語にはない。中川(2005)によれば、“敵味方”“笛太鼓”など、音節数の少ないものが前に来やすい傾向があると言う。トーザイと音読みすれば“東西”なのに、訓読みすれば“ニシヒガシ＝西東”になるのは、このルールに従ったが故である。音節数が多い語が前に来ている“上り下り”“殴る蹴る”は、日本語ではかなりの例外的事例だそう。

上記の日本語のルールに従うと、カブトムシとクワガタムシを並列させて表現するなら「カブト・クワガタ」になる。実際、大手通販サイトのAmazonの書籍カテゴリーで検索すると、「カブト・クワガタ」「カブトムシ・クワガタムシ」の語順の本が、「クワガタ・カブト」「クワガタムシ・カブトムシ」よりも多いことがわかる。無論、これはカブトの方がクワガタよりも音節が少ないからとの文法的理由であって、別にクワガタムシよりカブトムシの方が好きだ、との日本人の意識の表れではない。

ただ、書籍タイトルは別にして、日常会話でカブトとクワガタ、どちらを先に持ってくるかとなると、日本語のルール関係なく個人の好みに左右される傾向は見られる。虫屋の業界では、二大人気甲虫をカブト・クワガタと呼び、さらに「カブクワ」と略すことが多いようだが、SNS上では「ク

ワカブ」との略称も少なからず出回っているからである。筆者は試しに福井大学の学生85人に「カブト・クワガタ、クワガタ・カブトのどっちの呼び方がしっくりくるか？」とのアンケートを取ったところ、カブト・クワガタと答えたのは67人、クワガタ・カブトは18人となった。クワカブ派は意外と多いと評すべきか。

5) しかしカブトムシはクワガタムシよりも上位に位置する

(4)で「カブト・クワガタ」との語順は日本語のルールに従った結果であると解説した。ならば、日本人はカブトムシとクワガタムシを全く同列に扱っているかと言えば、それはまた違う。70年代のTVアニメ『タイムボカン』では、主人公たちが乗り込む主力機はカブトムシ型のメカブトンであって、クワガタムシ型のクワガッタンは補助的戦闘機にすぎないのである。

今や『タイムボカン』はあ懐かしの歴史アニメになってしまったが、現代でもカブトムシをクワガタムシよりも上に置く発想は根強く残っている。例えば、2012年発売のラブコメゲーム『ワンサイド・サマー』(図6)では、主人公の草薙枢と、その幼なじみの神ノ木汐が昔を懐かしんで虫捕りに行く場面がある。そして、小一時間の採集で、神ノ木汐はクワガタムシ7匹とカブトムシ2匹を、草薙枢はクワガタムシ7匹を捕った。すると、枢は「あちらはカブトムシが捕れているから自分の負けだ」と感想を抱くのである。何てことはない一場面にすぎないが、ここでもカブトムシ>クワガタムシとの潜在意識を読み取ることが可能なのである。



図6. 『ワンサイド・サマー』© 2012 ALcot Honey Comb.

何となくではあるが、カブトムシこそがクヌギ林の王者であって、クワガタムシは次席だと意識が世間にはあるのである。

6) 懐旧の象徴となるカブトムシ

ゲームやアニメの懐旧や郷愁のシーンでセミやコオロギの音が流されることは珍しくない(保科, 2019c). 彼らのように鳴き声を発してBGMになりきることはできないが, カブトムシもキャラクターたちの幼き頃の一場面の演出として登用されることがある. ようするに「子供の頃に一緒にカブトムシを捕ったよね」との思い出を語ったり, アルバムを見返したりするシーンである. 『とらいあんぐるハート2』(1999年ゲーム)『ひっぱりっこ』(2005年ゲーム)『となりの吸血鬼さん』(2018年TVアニメ)などはその事例だ.

『加奈…おかえり!!』(2004年ゲーム)(図7)におけるカブトムシの演出法は上記3作品とは趣が異なる. 藤堂隆道と病に冒された血の繋がらない妹の藤堂加奈の物語. 妹の余命が半年と知らされた, 秋のある日. 主人公と加奈は秋にレストランで食事をする. そのレストランで「生と死」との絵画が飾られ, その絵の下にカブトムシがとまっていた(模型のことか? 筆者は正しく文脈を読み取っている自信がない). 加奈と主人公は季節外れのカブトムシをじっと見つめる. その後, 自宅に戻った二人は幼き頃のアルバムを見る. そこでは健康な5歳の主人公がカブトムシを掲げた写真があった……. これは, 中々一筋縄ではいかない場面であるが, 従来の懐旧の対象に加えて, 生と死の象徴, そして秋には短い命を終える儂い存在としてカブトムシが描かれている, 稀有の事例である.

数多ある昆虫のうち, ユーザーのノスタルジーを掻き立てられるのは, セミやホタルなど特定の季節と結びつくものだけで, 逆に春から秋まで成虫がダラダラ出現し続けるキアゲハには務まらない



図7. 『加奈…おかえり!!』© Takayashiki R & D © 2004 D. O. corp. / © 2004 CD BROS. Inc.

い役回りである, と言うのが筆者の持論だ(保科, 2018b). カブトムシは四つの季節のうち, 人がもっとも郷愁を覚える夏の生き物である. そして, カブトムシを夏の象徴とみなす見方は戦前期に既に見られる. 例えば, 昭和10年7月8日付都新聞のラジオ番組欄の挿絵はカブトムシなのだ. となると, 現代のアニメやゲーム世界の幼なじみ同士の思い出話でカブトムシが重宝されても, 決して不思議ではない.

7) 少女の純真さを強調するカブトムシ

今やレトロゲーとされるぐらいに古い作品となってしまった半神の名作の『Air』(2000年)(図8). 令和元年世間を震撼させた放火事件により, はからずも名前が知れ渡ってしまった京都アニメーションがTVアニメ版を手掛けたことでも有名だ. この『Air』の冒頭で主人公の国崎往人とヒロインの神尾観鈴の出会いを紡いだのがカブトムシである, と言及したことがある(保科ら, 2010; Hoshina & Takada, 2012).

『Air』の冒頭におけるカブトムシの役割は, 神尾観鈴の純真さ, 無邪気さを強調することにある. 物語性を有するゲームにおいて, ヒロインがカブトムシに愛着を示す演出は決して珍しくない. 『Orange Pocket』(2003年)の綾瀬ナズナ, 『こんな娘がいたら僕はもう…!!』(2006年)の鈴原志乃, 『STEP BY STEADY』(2007年)の遠山泉水, 『しあわせ家族部』(2012年)のみそら, 『さくらにかげつ』(2015年)(図9)の大黒天なゆ, などはその一部の事例だ.

カブトムシへの愛情を持つことが少女たちの純真さの表れとなる. これはアニメやゲームにおけるクワガタムシの登場事例にも見られる演出だ(保科, 2019b). もっとも, これらの場面では彼女らの昆虫への親愛の情が描かれれば用を足すので

あって, 何も対象がカブトムシである必然性は全くない. カブトムシが採用された理由は, 単に一般人にも知名度のある昆虫だから, にすぎないと思われる.



図8. Dreamcast版『Air』© VisualArt's / Key / NEC インターチャネル.

8) 人のパートナーとなったカブトムシは少数か？

保科 (2019b) では、二次元世界で人のパートナーとなったクワガタムシをいくつか紹介したが、カブトムシについては好例があまり思い浮かばない。2012 年公開『映画ドラえもん〜のび太と奇跡の島』にはゴールデンヘラクレスと呼ばれるカブトムシの神様が登場する。もっとも神といっても偶像的存在に近いので、カブトムシが信者に対して直接語りかけるようなシーンは描かれていない。

数少ないパートナーのカブトムシの事例は、何と言っても 2004 年に稼働開始したアーケードゲーム『虫姫さま』(図 10) である。本作については保科ら (2010) で語り尽しているのので、ここでは繰り返さない。『虫姫さま』は、プレイヤーが主人公レコ姫の搭乗する「キンイロ」と言う名のカブトムシを操るシューティングゲームだ。敵も味方も虫だらけで、画面は虫の大群で埋め尽くされる。ちなみに、米国の昆虫学の専門教科書でも『虫姫さま』は、結構な文章量で取り上げられている (Kritsky & Smith, 2018)。とは言え、著者の Kritsky らは拙文 (Hoshina & Takada, 2012) を引用したにすぎず、彼らが実際にコントローラーを手にして『虫姫さま』をプレイしたわけではないだろう。

9) 結論。カブトとクワガタの似て非なる用いられ方。庶民的人気との点でクワガタムシに勝るカブトムシ

2005 年発売の PlayStation2 用ソフト『ラムネ〜ガラスびんに映る海〜』(図 11)。都会出身の少女の鮎川美空はツーリング先の田舎町でバイクが故障した。当分そこに滞在を余儀なくされた美空は、

事あるごとに田舎を馬鹿にする。しかし、周囲との人間の交流を重ね、彼女の心境に変化が生まれる…。都会から田舎への移住モノとしてはあまりにもベタな話展開だ。この田舎町でバイト先を探す美空が訪ねたのがカブトムシの養殖業者である。彼女は成虫は平気だったが、幼虫は苦手だと嫌がる素振りを見せた。ここでは、女の子はイモムシがキライとのよくある設定を指摘するのではなく、都会出身の少女であっても、カブトムシの成虫は何とか大丈夫と感じている、との点に着目したい。

とにかくマンガ・アニメ・ゲーム諸作品において、カブトムシは好意的に描かれていると断言してよい。文化兜虫学の結論はこのように単純なものとなる。最後に、甲虫人気番付において東西の横綱であるカブトムシとクワガタムシを比較考察して本稿を終えることとしたい。『甲虫王者ムシキング』や『仮面ライダーシリーズ』など、戦闘がメインとなる作品においては、カブトムシとクワガタムシの扱いに本質的な差はない。両者ともシンプルに格好良い武装昆虫と位置づけられている。

しかし、本稿 II 章 (6) で述べた、視聴者の懐旧や郷愁の心情を増幅させるとの役割においては、カブトムシはクワガタムシを大きく上回っているように思える。例えば、大人が嗜む清酒『かぶとむし』(図 12) の瓶ラベルには「あなたの少年時代は、いつでしたか」との文言が印字されている。酒を傾けながらカブトムシを必死に探した少年時を思い返して、とのメーカー側のメッセージなのだろう。

クワガタムシの場合、アニメやゲーム諸作品において、カネになる虫とのイメージで描かれることが多い (保科, 2019b)。それ故に作品中でギラ



図 9. 『さくらにかげつ』© 2015 ORANGE YELL. 右から 2 番目が大黒点なゆ。



図 10. 『虫姫さま』© TAITO CORP. 2005 © 2004 CAVE CO., LTD.



図 11. 『ラムネ〜ガラスびんに映る海〜』© 2005 ねこねこソフト / Interchannel, Ltd. / HuneX.



図 12. 清酒『かぶとむし』
(株式会社せんきん).

ファノコギリクワガタだの、ニジイロクワガタだの、オオクワガタだのと言った、ペット昆虫市場でお馴染みの専門的種名が躊躇なく使われる。戦後日本でクワガタムシは人々の意識に定着はしたが、どこか珍奇性があり、言わば高嶺の花であるとの発想が垣間見えるのだ。

一方、日本産種で言えば、カブトムシは生物学的にクワガタムシよりは捕りやすく飼いやすい。仮にペット市場で購入するにしてもクワガタムシよりは安いので、カブトムシはカネとの感覚はフィクション作品で描かれにくい。次に、子供たちにとって重要な戦闘力

であるが、日本産種に限って言えば、カブトムシは原則クワガタムシよりも強い。最後に、日本にクワガタムシが約 50 種も生息しているのに対して、カブトムシは 5 種程度、実質は 1 種である。それだけにカブトムシの姿形は誰しもが脳内に明確に描くことができる。

以上まとめると、珍奇性がもてはやされる側面を残すクワガタに対して、カブトムシの人気の根本は大衆性である。それ故に、庶民の心身の身近にいるカブトムシは懐旧や郷愁の象徴となりうるのである。

謝辞

清酒の空き瓶を提供して下さった、本会会員の亀澤洋氏に厚く御礼申し上げる。

※本稿を執筆するにあたり、筆者は科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)の基盤研究(C)(課題番号:18K00254)の助成を受けている。

引用文献

- 秦 郁彦, 1961. 日中戦争史. 河出書房新社. 369 pp.
Hoshina, H., 2017. The prices of singing Orthoptera as pets in the Japanese modern monarchical period. *Ethnoentomology*, 1: 40–51.
Hoshina, H., 2018. The prices of fireflies during the Japanese modern monarchical period. *Ethnoentomology*, 2: 1–4.

- 保科英人, 2014a. お雇い外国人グリフィスが描いたお伽話の中の日本の甲虫たち. さやばねニューシリーズ, (13): 26–34.
保科英人, 2014b. 戦前の新聞に見る昆虫漫画. 日本海地域の自然と環境, (21): 107–117.
保科英人, 2017a. 近現代文化蛭学. さやばねニューシリーズ, (26): 38–46.
保科英人, 2017b. 鳴く蟲の近代文化昆蟲學. 日本海地域の自然と環境, (24): 46–73.
保科英人, 2018a. 明治百五拾年. 近代日本ホテル売買・放虫史. 伊丹市昆虫館研究報告, (6): 5–21.
保科英人, 2018b. 明治百五拾年. アキバ系文化蝶類学. 環境考古学と富士山, (2): 46–73.
保科英人, 2019a. 文化蛙学. 近代日本人とカジカガエル. 日本海地域の自然と環境, (25): 127–136.
保科英人, 2019b. 近現代文化鋸形虫学. さやばねニューシリーズ, (35): 12–20.
保科英人, 2019c. 脇役に甘んじる昆虫たち. p. 37–54. 保科英人・宮ノ下明大, 大衆文化のなかの虫たち. 文化昆虫学入門. 論創社. 318 pp.
Hoshina, H. & K. Takada, 2012. Cultural coleopterology in modern Japan: The Rhinoceros beetle in Akihabara culture. *American Entomologist*, 58 (4): 202–207.
保科英人・稲木大介・丹治真哉・廣田美沙, 2010. アキバ系の文化甲虫学～序章～. ねじればね, (128): 5–19.
金子浩昌・小西正泰・佐々木清光・千葉徳爾, 1992. 日本史のなかの動物事典. 東京堂出版. 266 pp.
Kritsky, G. & J. J. Smith, 2018. Insect biodiversity in culture and art. p. 869–898. Robert, G. F. & P. H. Adler, (eds.). *Insect biodiversity*. Wiley Blackwell, Hoboken, Chichester. 987 pp.
蔵原三雪, 2000. W. E. Griffis の理化学教養の形成. 一ラトガース大学科学教育の展開を通して. 科学史研究, 39: 144–153.
宮ノ下明大, 2014. 映画(特撮・アニメ・実写)に登場する昆虫. p. 241–271. 三橋 淳・小西正泰編. 文化昆虫学事始め. 創森社. 273 pp.
森永卓郎監修. 甲賀忠一・制作部委員会編, 2008. 明治・大正・昭和・平成. 物価の文化史事典. 展望社. 477 pp.
中川正之, 2005. 漢語からみえる世界と世間. 岩波書店. 201 pp.
岡田實麿訳・エドガー・アラン・ポー原著, 1913. 甲蟲・渦巻・没落. 北文館. 266 pp.
龍膽寺雄, 1986. 龍膽寺雄全集第十一巻. 昭和書院. 343 pp.
田中利幸, 2008. 空の戦争史. 講談社現代新書. 253 pp.
円谷プロダクション監修, 2005. 決定版全ウルトラ怪獣. 講談社. 121 pp.

(2019年7月26日受領, 2019年9月1日受理)

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6 号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒 142-0051

東京都品川区平塚 2 丁目 5 番 8 号

郵便振替 00130-4-21129

電話 (03) 5858-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3784-6464

(カタログ贈呈) (株) 志賀昆虫普及社